

小学校生活科の意義と課題 —幼稚園教育との関係—

福田 啓子

(平成7年9月30日受理)

The Purpose and Subject on Life Environment Studies —The Relation with Kindergarten Education—

Keiko FUKUDA

(Received September 30, 1995)

I. はじめに

従来、幼稚園年長児(終了年次)と、小学校低学年児童とは、心身の発達において、類似の特徴を持つにもかかわらず、教育面では両者の間に大きな段差があることが指摘されてきた。すなわち、前者は、遊びを中心とした総合的指導に対し、後者は、各教科としての知育中心指導が行われている傾向が強かったのである。そして、幼稚園と小学校の間の溝を埋めていくためには、それぞれの長所をお互いがどう取り入れるかという考え方で進められてきた。

小学校教育と中学校教育においては、これまでも重ねて学習指導内容の調整がなされてきているが、幼稚園教育との間には、十分な一貫性が図られてきたとは言いがたい状況にあった。幸いなことに、教育課程の改善によって、小学校においては、「国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育を充実するとともに、幼稚園教育や中学教育との関連を密接にして、各教科等の一貫性を図ること」^{註1)}と改訂の基本方針に示され、低学年に「生活科」が新設された。また、幼稚園教育要領も改訂され、両者の連携が密接に図られるよう配慮されたことは、周知の通りである。

この小学校教育においての、教科の改廃を伴った生活科の新設は、歴史的にみても実に画期的なことであり、教育全体の注目すべき事柄であるといえるだろう。

そこで、今回は、このような意味をもつ生活科の成立までの経緯、趣旨、目標や内容を捉え、実践上の問題点を把握するとともに指導の要点を挙げ、さらに指導例を取り上げ、幼稚園教育との関係を考察していきたい。

家政学部児童学科

II. 生活科成立の経緯

小学校教育における戦後の新教育は、昭和22年の学習指導要領(試案)を最初とし、現在までに5回の改訂が行われているが、平成元年の改訂では、初めて教科の改廃がなされた。すなわち、低学年の理科および社会科が廃止され生活科が新設された。しかし、これは突発的なものではなく、新教科設立に至るまでには次のような経緯がみられる。

昭和30年代末から40年代にかけては、学校教育内容に関する論争が盛んに行われ、中でも「小学校低学年においては、科学的社会的認識が不可能である」という考え方による「社会科存廃論」や同じく「低学年理科」のあり方が問題とされていた。昭和42年10月教育課程審議会の答申は、低学年社会科については、「具体性に欠け、教師の説明を中心にした学習に流れやすい内容の取扱いを検討し、発達段階に即して効果的な指導ができるようにすること」また、理科については、「低学年では、児童自ら身近な事物や現象に働きかけること尊重し、経験を豊富にするように内容を改善する」とし、これを受けて翌年学習指導要領が改訂された。

昭和46年の中央教育審議会の答申では「特に、低学年においては、知性、情操、意志および身体の総合的な教育訓練により、生活および学習の基本的な態度、能力を育てることが大切であるから、これまでの教科の区分にとらわれず、児童の発達段階に即した教育課程の編成の仕方について再検討する必要がある」と指摘され、総合的な教育が可能な教育課程の再検討が必要であることを述べている。

昭和50年10月の教育課程審議会「中間まとめ」では、

小学校低学年については、「社会科及び理科の内容を中心として、例えば、児童が自分たちをとりまわっている社会的及び自然的な環境について学習することを共通のねらいとするような目標と内容をもった新しい教科を設けることについても研究してみる必要がある」と提示され、理科、社会の内容を中心とした新教科の検討が求められた。さらに、昭和51年12月の教育課程審議会「答申」は、「低学年においては、児童の具体的かつ総合的な活動を通して知識、技能の習得や態度・習慣の育成を図ることを一層重視する措置をとること」と示している。それは、幼稚園の普及に伴って小学校教育との適切な連携の在り方を探ろうとするものであり、低学年の総合学習の取り組みをより、目指したものであった。そして、翌年、告示のあった小学校学習指導要領理科「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」には、「低学年の指導に当たっては、児童がみたり、探したり、育てたり、作ったりするなどの活動を通して自然の特徴をとらえるようにするとともに、特に言語、数量、造形などに関する諸活動との関連を図り、指導の効果を高めるように配慮する必要がある」と示された。

昭和58年になると、新たに低学年の教科構成について、「国語、算数を中心としながら、既存の教科の改廃を含む再構成を行う必要がある」と提示された。昭和61年4月には、臨時教育課程審議会「第2次答申」で教科再構成の方向が明示され、昭和62年12月、「理科」および「社会」を廃止し、「生活科（仮称）」の設置が提言された。そして、平成元年3月15日、学習指導要領の告示により、「生活科」が誕生し、平成4年4月全面実施にこぎ着けたのである。

一方、幼稚園教育要領も、幼児を取り巻く社会環境の変化に対応し、昭和39年以来、実に25年ぶりに改訂が行われていることは注目されることである。

Ⅲ、生活科の趣旨とねらい

生活科新設の背景には、長い検討期間があったことは先に述べたが、近年、「小学校低学年の児童の発達課題に沿った教育内容の構成が必要」、「現代の子供の実態を考えて」、「幼稚園との接続を考えた小学校教育の在り方」等を求める声が高まっていった。

新学習指導要領は、教育課程審議会答申を受けて編成されたが、同答申の「小学校における各教科の編成等」では、次のように述べられている。

小学校の中学年及び高学年の各教科の構成については現行どおりとするが、低学年については、生活や学習の基礎的な能力や態度などの育成を重視し、低学年の児童の心身の発達状況に即した学習指導が展開できるようにする観点から、新教科としての生活科を設定し、体験的な学習を通して総合的な指導を一層推進するのが適当である。生活科は、具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然との関わりに関心をもち、自分自身の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養うことをねらいとして構想するのが適当である。

そして、生活科新設の趣旨を以下のように述べている。

- (1) 低学年児童には、具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴がみられるので、幼稚園教育との関連も考慮して、直接体験を重視した学習活動を展開し、意欲的に学習や生活をさせるようにする。
- (2) 児童を取り巻く社会環境や自然環境を、自らもそれらを構成するものとして一体的にとらえ、また、そこに生活するという立場から、それらに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるようにする。
- (3) 社会や自然及び自分自身に関わる学習の過程において、生活上必要な習慣や技能を身に付けさせるようにする。
- (4) (1)～(3)の事柄は、学習や生活の基礎的な能力や態度の育成を目指すものであり、それらを通じて自立への基礎を養うこととする。

すなわち、生活科は、具体的な活動や体験を通して、よき生活者として求められる能力や態度を育てること、自立への基礎を養うことを空極のねらいとして誕生した教科なのである。そして、生活や活動を重視することは、学問の伝授ではない、追求する能力を有する自立した子どもを育成するという従来の教科とは、異なった教科として存在しているのである。

生活科新設の趣旨は「幼稚園教育との円滑な接続を図ること」にあったことは先にも述べたが、これは、小学校低学年だけでなく、幼稚園教育の改善ということにおいても、よりその方向性が強くなった。

幼稚園教育内容の改善の視点は

- (1) 人との関わりをもつ力を育成すること
- (2) 自然との触れ合いや身近な環境との関わり合いを深めること

(3) 基本的な習慣や態度を育成すること

と示されているが、これらを「生活科設定の趣旨」と併せ考えると、幼稚園教育の延長・発展の線上に生活科が存在していることが明らかである。

さらに、表2の「幼稚園教育要領と小、中、高の学習指導要領の改訂」をみてもわかるように、幼稚園から高校の一貫教育という立場からの改善の一環として幼稚園教育要領が改訂、生活科が新設されたといえるだろう。

IV. 生活科の目標と内容

ここでは、教育目標、学年目標はどのように設定されているのか、内容はどのような視点から構成されているのか、などについて追求し、生活科の本質を明らかにしたい。

1. 教科目標

新学習指導要領では、教科目標は次のように示されている。

「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然との関わりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立の基礎を養う」

さらに、

- (1) 具体的な活動や体験を通すこと
 - (2) 自分と身近な社会や自然との関わりをもつこと
 - (3) 自分自身や自分の生活について考えること
 - (4) 生活上必要な習慣や技能を身に付けること
- といった4つの視点を押さえることによって「自立への基礎を養うこと」としている。

低学年では、望ましい人間形成が期待できるよう学習や生活のしっかりした基盤をつくるのが大切なことであり、この時期に具体的な活動や体験を通して身に付けさせていこうとするものである。「自立への基礎を養う」ことは、小学校教育全体で目指すことであるが、幼稚園教育や他の教科との関連を図りながら、その中心として設定されたのが生活科といえるであろう。

2. 学年目標

教科目標を受けて、各学年の目標は第1学年および第2学年共通であり、次のような3項目が示されている。

- (1) 自分と学校、家庭、近所などの人々及び公共物との関わりに関心をもち、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動する

表1

幼稚園教育要領及び小、中、高等学校学習指導要領の改訂

ねらい	これからの社会の変化とそれに伴う幼児・児童・生徒の生活や意識の変容に配慮しつつ、生涯学習の基礎を培うという観点に立ち、21世紀を目指し社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を図る。	
方針	①心の教育の充実；教育活動全体を通じて、幼児・児童・生徒の発達段階や各教科等の特性に応じ、豊かな心をもちたくましく生きる人間の育成を図る。 ②基礎・基本の重視と個性教育の推進；国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を教育を充実するとともに、幼稚園から高等学校までの各教科等の内容の一貫性を図る。 ③自己教育力の育成；社会の変化に主体的に対応できる能力の育成や創造性の基礎を培うことを重視するとともに、自ら学ぶ意欲を高めるようにする。 ④文化と伝統の尊重と国際理解の推進；我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視するとともに、世界の文化や歴史についての理解を深め、国際社会に生きる日本人としての資質を養う。	
主な改善点	幼稚園	6領域であったのを、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域に再編成する。
	小学校	低学年における社会科と理科を廃止する。「生活科」を新設する。
	中学校	選択履修の幅を拡大する。授業時数の弾力的運用を図る。
	高等学校	社会科を「地理歴史科」と「公民科」に再編成する。 家庭科を男女が履修する。普通科における必修単位を32単位から38単位に増加する。

ことができるようにする

- (2) 自分と身近な動物や植物などの自然との関わりに関心をもち、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや

生活を工夫したりすることができるようにする

- (3) 身近な社会や自然を観察したり、動物を育てたり、遊びや生活に使うものを作ったりなどして活動の楽しさを味わい、それを、言葉、絵、動作、劇化などにより表現できるようにする

このように、生活科は、低学年教育の充実と改善を目的とした教科である。目標には、低学年の特性を生かす配慮が随所みられ、幼稚園教育との関わりも考慮されている。ちなみに、幼稚園教育要領（基本第一）では、

- (1) 幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
 (2) 心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通してのねらいが総合的に達成されるようにすること。
 (3) 幼児一人一人の特性に応じた発達の課題に即した指導を行うようにすること

と示され、これらの内容は、生活科教育の目標と共通するものである。特に、「遊び」に関してしてみると、幼稚園教育では、幼児の「遊びを通してのねらいが総合的に達成されること」が挙げられているのに対し、小学校では、「遊びや生活を工夫したりすることができる」となっている。すなわち、小学校では、従来、「遊び」は学習目的達成のための手段として取り入れられていたのが生活科において、今回この「遊び」を学習として位置づけられたことは、画期的なことであり、幼稚園教育と指導面での接続が図られるようになったということであろう。

3. 内容構成

生活科の内容は、ねらいを達成するために、児童の実態や目指す児童像、社会的要請を考慮して設定される。内容選択の基準としての視点は、

- (1) 基本的な視点
 ①自分と社会（人々）との関わり ②自分と自然との関わり ③自分自身の3項目
 (2) 具体的な視点
 ①健康で安全な生活 ②身近な自然との触れ合い ③身近な人々との接し方 ④季節の変化と生活との関わり ⑤公共物の利用 ⑥物の制作 ⑦生活と消費 ⑧自分の成長 ⑨情報の伝達 ⑩基本的な生活習慣や生活技能の10項目。

このように、生活科の内容構成の基本的な考え方は、「内容選択の視点」を設けたことであり、実際の指導計

画を作成する際には、各視点の関係や比重がよく検討されなければならない。

4. 学年の内容

学年目標については、2学年まとめて設定されていたが、内容では、各学年の活動に特色が求められ別になっている。

〈第1学年の内容〉

- ①学校 ②家庭 ③公園 ④土・砂（遊び） ⑤動物 ⑥入学してから（①～⑥著者独自の表記）

〈第2学年〉

- ①町 ②乗り物 ③季節 ④木の葉・実（遊び） ⑤動物 ⑥生まれてから（①～⑥著者独自の表記）

各学年の6項目の内容は、生活科の目指す児童像、学校教育に求められる社会的要請など多様な要因によって生み出されたものである。そして、それぞれに独立しているものではなく、「自分」という視点で関連し、1学年から2学年に発展的に関連しているものである。

例えば⑥では「入学してからの自分自分のできるようになったことや自分の役割が増えたことがわかる（1学年）」は「生まれてから自分の成長には、多くの人々の支えがあったことが分かる（2学年）」など系統的に発展させるよう構成されている。

V. 生活科の指導

1 問題点

生活科が全面実施されて以来、様々な課題を克服しながら、各小学校で授業が展開されている。これまでに、研究会や校内研修会等において指摘されてきた内容は、以下のように集約される。

- 生活科設置の趣旨とその背景が明確でない
- 生活科と従前の低学年社会・理科との共通点・差異点
また、これまで低学年社会、理科で目指してきた事柄はどう生かされるのか
- 具体的にどのような授業を展開したらよいのか
- 評価の方法をどうするのか
- 授業時間数が3時間では少ない
- 自立の基礎とはどうとらえたらよいのか
- 年間にわたる単元に地域の特色をどう出すのか
- 地域マップの作成と活用の方策をどうするのか
- 第3学年以上の各教科等にどう関連するのか
- 理科、社会に発展するという考えに問題はないか
- 気付きは軽視されてよいのか

○教師の役割、適切な支援とは何か

○幼稚園教育との関連をどう図ったらよいか

2 生活科学習の配慮事項

上述の問題解決にあたっては、これまでに経験のないことであり、特に学習指導要領上の配慮事項と評価が課題となった。そして、次の2項目が強調されたのである。

〈学習指導のポイント〉

①教科としての特徴を理解すること

何を教えるかだけでなく、何を育てるかが大切であり、児童の自発性を重視する。また、総合的な学習活動を行い、活動や体験を重視するところに特徴がある。

②教師の役割を理解すること

教師が教える教科ではない。児童が学ぶことが大切。教師は、主体的な活動を促す援助者に徹すること。

③学習意欲を喚起すること

児童の生活課題により、具体的活動により、また、教師による環境構成によって学習意欲を喚起する。

④多様な活動や体験をさせること

児童の発想による多様な活動や体験をさせ、活動の楽しさを味わわせることが必要である。

⑤個に応じた学習指導をすること

一人一人の児童に応じた指導を工夫する。そのため、活動選択の幅をできるだけ広げることが必要である。

⑥自分自身に目を向ける学習指導を進めること

自分自身に目を向けることは生活科の重要な祖点である。自分の行動の在り方を考えさせることが大切

〈評価の観点〉

①身近な社会や自然への関心、思考

②自分自身の生活への関心、思考

③生活上必要な習慣、技能 ④実践的態度

なお、平成3年3月の児童指導要録による評価項目は

①関心、意欲、態度 ②表現、思考 ③気付き である。

3 新しい学力観に立つ生活科の指導

小学校の各教科においては、学習指導要領が目指す教育を実現するため、新たに「新しい学力観に立つ指導」が重視されるようになり、生活科では次の項目がその課題となっている

①新しい学力観に立つ小学校教育と生活科の教育

○新しい学力観に立つ小学校教育の実現

○生活科とこれからの小学校教育

②生活科授業づくりのポイント

○環境の構成と指導計画の改善

○教師の支援の在り方

(1) 一律的な指導から一人一人に応じた支援へ

(2) 子どもの思いや願いを受容する支援

(3) 待つ支援と引き出す支援

・試行錯誤を見守り待つ

・ゆとりある指導計画を立てる

・適時性のあるかかわり方をする

・意欲や創意、工夫を引き出す

○子供と共に活動する支援

③評価を指導に生かす

○子供の興味、関心、意欲、態度を重視する

○子供の思考の特色とその受容の契機を明かにする

○環境や自分についての気付きを見取る

○やる気と自信を育てる

④幼、小の関連を図る

⑤第3学年以上への発展

⑥生活科の学習指導と評価

○生活科評価の特色

○生活科評価の方法

○新指導要録と生活科の評価

ここでは、授業づくりのポイントとして、特に、教師の支援の在り方を重視したが、生活科は、知識中心ではなく、知恵を身につける教科であることから、教師には、児童に対し、援助・助言することが何よりも求められているということからである。また、幼、小の関連を図ることについては、幼稚園教育での幼児期に身に付いたものの、芽生えたものが、小学校生活につながっていくという視点から、教育の在り方を見直し、生活科を両者の関連の要としてとらえていこうとするものである。

4 実践例

表4は、幼稚園教育と最も関係が深く、生活科の本質をとらえていると思われる指導事例を取り上げたものである。

本時の学習（第1次、第1、2時・・・赤ちゃんのころなど小さいころに行ってみよう）における指導内容では、教師は、事前に保護者の協力を得て、乳幼児期の衣服、履き物、写真などを集め、展示したり、近隣の幼稚園や保育園から、机、椅子、遊具などを借用してきて準備をしなければならない。また、実際「タイムトンネル」をくぐって、その場に臨んだ児童が、関心を寄せるのが幼稚園や保育園で使っていたものである。そして、この記憶は鮮明であり、「お世話になった（先生、友人など）

表2 第2学年生活科学学習指導案の例

<p>1 単元名 「大きくなったんだね がんばろう」</p> <p>2 単元の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生まれて現在までの自分の生活や成長を進んで調べようとしている。 ○生まれてから、現在までの自分の生活や成長についてアルバムにすることができる。 ○自分の成長を見守ってくれた多くの人々の存在に気づく。 ○自分の成長を見守ってくれた多くの人々に感謝の気持ちをもつことができるようにする。 <p>3 単元について</p> <p>学校生活にすっかり慣れ、自分一人で数多くのことをできるようになってきたという自信がみられる。それに伴い上級生になることへの自信と自覚が子供たちによくみられる。さらに、学校や家庭での生活の中で様々な経験を通して、心も体も人間関係も大きく成長している。しかし、「親の言うことにいちいち口ごたえをする」「自分で大きくなったような口をきくことが多くなった」という声が保護者の中から聞こえてくるのも事実である。</p> <p>このような時期に、幼少時からの自分の成長を振り返る単元を設定し、自分の成長、特に自立には多くの人の支えがあったことに気付くようにし、感謝の気持ちと今後への意欲を持つことができるようにしていくことは、たいへんに興味深いことと考える。</p> <p>1年生でも自分の成長を振り返る学習活動を行ったが、それは子供自身がしっかりと覚えていた（入学してから一年間）のことについてであった。2年生では、自分の成長を支えてくれた人の存在に気づき、感謝の気持ちをもつために、誕生までさかのぼって振り返る学習活動を展開していきたい。</p> <p>なお、単元全体を通して、子供一人一人の成長等におけるプライバシーには、十分配慮するようにする。</p> <p>4 育てたい児童像</p> <p><心豊かな児童></p> <ul style="list-style-type: none"> ○生命や環境を大切にす子供 <p>誕生から現在に至るまでに子供は家庭や学校での生活の中で様々な経験をしている。自分の成長を振り返ることにより、自分の命の尊さを感じることができるであろう。そして、本単元を通して、友達のスバラしさに気付く活動を通して、友達を大切にしていこうとする気持ちも育てたい。</p> <p>さらに、自分が成長する上で世話になった人々に気づき、感謝する気持ちをもつことができるようにしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の思いや願いをもつことができる子供 <p>自分が誕生からこれまでの生活の中で利用してきたものに触れることにより、「自分の小さい頃はどうかだったのだろう」「調べてみたい」などという思いや願いをもつことができるであろう。</p> <p><たくましい児童></p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の思いや願いの実現に向けて活動できる子供 <p>子供一人一人が自分の小さい頃について興味や</p>	<p>関心をもったとき、「調べてみたい」という思いや願いをもつ。この思いや願いを実現するために父や母など身の回りの人に尋ねたり、小さい頃の写真等で調べたりする活動が生まれるであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分のよさや可能性を生かして表現できる子供 <p>自分が生まれてから今までのことを振り返る活動を通して、自分のよさに気付くであろう。その時子供は、これからの生活に自信と意欲をもって臨むことができると考える。</p> <p>5 育てたい児童像と迫るための手だて</p> <ul style="list-style-type: none"> ○体験活動の充実 <ul style="list-style-type: none"> ・意義ある体験・・・赤ちゃん、保育園、幼稚園入園前、入園後の頃の生活を振り返ることができる体験活動を考える。衣服、遊具、生活用品等に触れる活動を取り入れる。タイムトンネルをくぐって昔の探検に出かけようとする。 ・発展性のある体験・・・「タイムトンネルをくぐって昔の探検に出かけよう」の活動を通して自分の小さい頃のことを調べてみたいという思いや願いをもつことができるようにしたい。 <ul style="list-style-type: none"> ○多様な学習方法 <ul style="list-style-type: none"> ・家庭での調べる活動・・・個の思いや願いを生かした学習を進めることができるように、保護者会や学年通信等を通して、保護者の理解と協力を得る。 ・保護者の参加・・・授業の中で、小さい頃の思い出等の話を保護者から聞くことを通して「調べてみたい」という思いが深まるようにする。 ・アルバム作りから発表会へ・・・一人一人の子供が調べたことを資料として作ったアルバムをもとにして、自分の小さい頃を発表し合う場を設けた。その中で、人によって成長の様子が違うことに気づくようにすると共に、他を認める気持ちをもつことができるようにしたい。 ・感謝の気持ちを伝える・・・手紙を出そうの学習活動を生かし、世話になった人に対して手紙等を書く活動を取り入れる。 ・興味や関心を生かした活動を進める・・・昔探検の活動の中で子供一人一人の興味や関心を全面に出して活動できるように、T・T方式を取り入れる。 <ul style="list-style-type: none"> ○指導と評価 <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りカード・・・分かったこと、楽しかったこと、なぜだろうと思ったこと、次に授業でやってみたいこと等を書く活動を取り入れ、子供の感じ方、考え方をつかむ。 <p>6 子供の実態</p> <p>2年生も3学期を迎え、子供たちは3年生になることに少しづつ意識するようになってきている。3年生になる時には、学級編成替えがあり、進級への期待や不安は1年生から2年生になる時に比べてかなり大きいと思われる。また、弟や妹が新1年生として入学するという子供が多いためか、「4月からは弟や妹を連れて学校に来るんだ」など年長者としての自覚や自信も強く感じられる。この上級生になることへの自信と自覚は、学校生活にすっかり慣れ、何でもできるようになったという自信から生まれてきているものと考えられる。2年間の生活科の学習を振り返っただけでも、先生、</p>
---	---

主事さんと話をする、ウサギの世話をする、野菜を育てる、切符を買って電車に乗る、郵便を利用して手紙を出す、など数多くのことを自分一人でできるようになってきた。この他、学校や家庭の生活の中で多くの経験をしてきている。

子供たちに質問紙法で「生まれてから今までのこと」について調査をした。その結果、小さい頃のことは、断片的には覚えている子供をいるが、成長の上で多くの人と関わりがあったことについては、あまり意識していないことが分かってきた。そこで、このような時期に自分の成長を振り返る学習を設定した。

7 学習活動計画

<第1次>タイムトンネルをくぐってむかしたんけ

んに出かけよう。

第1,2時・・・赤ちゃんのころなど小さかったころに行ってみよう。

第3時・・・自分が調べたいことを決めよう。

<第2次>自分のアルバムを作ろう

第4時・・・調べたいことをまとめる方法を話合おう。

第5,6,7,8時・・・調べてきたことをもとに自分のアルバムをつくろう。

<第3次>アルバムの発表会をしよう

第9,10時・・・アルバムの発表会の準備をしよう

第11,12時・・・アルバムの発表会をしよう

第13時・・・お世話になった人に手紙を書こう

8 本時の学習

第1次 第1、2時

学習活動の例

ね | タイムトンネルをくぐって、むかし探検をする活動を通して、小さい頃と今の自分を比べて、成長の実感を
ら | もつことができるようにする。
い | 小さい頃のことを調べたいという願いをもつことができるようにする。

子供の活動・思いや願い

1. 本時の活動に期待を寄せる。
「本当に行けるのかな」
「わくわくするな」
2. タイムトンネルをくぐって、小さいときの園に探検に行く。
・ タイムトンネルをくぐって、むかしたんけんにいってみよう。
「わあ、すごい」
「小さいときにあそんだものがいっぱいだ」
3. 自分の行きたい園を選び、探検する。
「どこの園をたんけんしようかな」

- ・ 赤ちゃんの園
- ・ おもちゃの園

○ ほいく園・ようち園の園

「机や椅子こんなに低かったかな」
「三輪車はもうきつくてこげない」
「ジャングルジムがこわれそう」
「絵本なんて、すぐ読めちゃうな」
「こんな小さなおふろ入れないよ」

4. 探検を振り返る。
探検して気付いたことを発表する。
・ 実演を交えて、説明してもよいことを伝える。
5. 保護者の話を聞く。

○ 本時の活動を通して、次時への活動の思いや願いをもつ。

教師の支援

- 今日の活動の意欲付けをする。
・ 子供と共に、今日の活動に対し「楽しみだな」という気持ちを演技する。
- 自分の行ってみたい園を決めて、活動をしているか。
・ 楽しく活動している子供に対しては、見守る。
・ 活動していない子供に対しては、「小さい頃の自分になって遊んでごらん」と言葉かけをする。
- 子供の活動の中でのつぶやきを大切に、共感しながら聞くようにする。
・ 昔を思い出し、今と比べることができるように、働きかける。
- 諸感覚を使い、昔を思い出して遊んで子供には、「小さいときのものを今使っどんな感じがする」と言葉かけをする。
・ 赤ちゃんの頃の洋服を手にとっている子供には、「着ることができるかな」などと、
・ 乗用玩具等を利用している子供には、「乗り心地はどう」などと言葉かけをする。
- 探検して気付いたことを発表することができるか。
・ 一人一人の子供が感じたことを共感的な気持ちで受け止めるようにする。
・ 昔(小さい頃)と今の自分の比較の上での発表することができるか。
・ 発表することができた子供には、目のつけどころのすばらしさをほめるようにする。
・ 保護者の話を子供と共に、「そうだったんだ」「そんなことがあったんだね」などと、共感しながら聞くようにする。
- 保護者への質問を行う場を設け、自分の小さかった頃のことについて、調べてみたいという気持ちを高めることができるようにする。
- 次時への活動の思いや願いをもつことができたか。

にお便りを書きたい」と願う気持ちに発展していくのである。このように、本事例は、直接的で有りすぎるかもしれないが、幼稚園教育との関連からみると実に意味のある内容だと思われる。

VI, まとめと今後の課題

以上、生活科成立の経緯、趣旨、目標と内容、さらに指導についての問題や指導の要点を幼稚園教育との関係を含めて述べてきた。生活科は新設の教科である。単に理科と社会を合科したものではなく、小学校低学年のみならず、小学校教育全体の充実を目的とし、児童一人一人ひとりが生き生きとたくましく生きる知恵を学ぶ教科である。これまでの小学校教育では、知識・理解の側面だけが重視される傾向にあったことは否めない。生活科では、子供の興味や関心を把握し、体験学習を通して活動意欲を促していくことを目指している。そして、これらの内容は、幼稚園の考え方と共通するものであり、生活科の推進によって幼稚園から小学校への移行の段差が狭められるであろうことは言をまたない。

今、幼稚園教育や生活科に期待されていることは、幼児、児童と共に活動し、共に感じ、愛情ある援助ができる教師の指導性であり、新たな課題に積極的に取り組む姿勢であると考えられる。同時に、これからの意欲ある実践的研究が期待される。

21世紀に向けて、新しい時代を迎えるに当たっての人間教育の問題が問われている中で、生活科の目的を最大限に生かせる環境設定と指導方法について直接指導に携わる教師と共に検討していくことを今後の課題としたい。

謝辞

本稿を進めていくにあたって、貴重な資料、また諸助言をいただきました初等教育研究室菊池健夫先生に、心

から、感謝申し上げます。

註

- 1) 文部省「小学校指導書 教育過程一般編」
教育出版 1987
- 2) 文部省「小学校指導書 生活編」
教育出版 1988
- 3) 文部省「小学校 生活 指導資料・指導計画の作成と学習指導」 東洋館出版社 1990
- 4) 文部省「小学校 生活 指導資料・新しい学力観に立つ生活科の学習指導」 東洋館 1993
- 5) 文部省「幼稚園教育指導書 増補版」
フレーベル館 1989
- 6) 文部省「小学校指導書 理科編」
大日本図書 1977
- 7) 東京都教育庁指導部資料 1994
- 8) 練馬区立開進第三小学校実践報告書 1994

参考文献

- 1) 日本生活科教育学会編「生活科テキスト」
明治図書 1995
- 2) 中野重人「生活科教育の理論と方法」
東洋館出版社 1992
- 3) 奥田真丈他「小学校学習指導要領の解説と展開」
教育出版社 1989
- 4) 文部省内教育課程研究会「生活科の解説と展開」
教育開発研究所 1986
- 5) 文部省小学校課・幼稚園課編集「初等教育資料」
東洋館出版 1993
- 6) 教職研修総合特集「生活科読本」
教育開発研究所 1987